

令和3年2月13日

令和3年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸（陶・磁・ガラス造形）

注意事項

- ・ 試験が終わるまで、携帯電話等の通信機器は音が鳴らない設定にして配布された封筒に入れること。
- ・ 写真撮影等、一切の記録を禁止します。
- ・ トイレに行く際は必ず受験票を携帯すること。
- ・ 与えられた問題用紙、草案用紙等は持ち帰らないこと。

令和3年2月13日

令和3年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸（陶・磁・ガラス造形）

本日の試験は下記の時間割で行います。

■ 筆答試験 / 試験場（陶芸研究室）

10:00 ~ 11:15

◇ 昼食 / 試験場（陶芸研究室）

11:20 ~ 12:25

■ 実技試験 / 試験場（陶芸研究室）

12:30 ~ 14:30

令和3年2月13日

令和3年度 東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程・第2期）
入学者選抜試験 陶芸（陶・磁・ガラス造形）

筆答試験

（10：00～11：15）

問題 1

以下の文章が説明している語句を解答用紙に答えなさい。

[1] 窯下部に設けられた焚口から燃焼炎が炉壁に沿って上昇したのち、炉内を下降して底部の穴から煙道・煙突へ吸引される燃焼方式。ガス窯や灯油窯の多くがこの方式を採用している。

[2] 耐火度が高く、可塑性、乾燥強度の大きい炭質風化堆積粘土のこと。炭化した木片を含むことが多いことから名づけられたといわれる。主に愛知県瀬戸・猿投地区、岐阜県東濃地区、三重県島ヶ原地区などに産出する。

[3] 昭和23年（1948年）に八木一夫、山田光、鈴木治など京都の若手陶芸作家を中心に結成された陶芸家集団。昭和29年（1954年）に初めて純粋な立体造形作品を発表して以降、前衛陶芸の作風を確立し、それまでの陶芸の概念にとらわれない実用性を排した表現から、「オブジェ焼き」と称された。平成10年（1998年）に解散。

[4] 古墳時代中期から平安時代にかけて焼かれた硬質土器。朝鮮半島から伝わり、丘陵斜面に築かれた窖窯で1100℃以上の高温で還元焼成されたやきものをいう。主に青灰色もしくは灰黒色となる。

[5] 石川県南部の金沢市、小松市、加賀市、能美市などで生産されている陶磁器の総称。江戸時代から続き、特に江戸前期、後期、明治以降の近代、現代に分類される。五彩や金欄手などの色絵磁器が特徴である。

[6] 陶磁器の装飾技法の一つで、成形素地に金属化合物を水に溶かした塩基性液体顔料を用いて描画彩色し、釉薬を掛けて本焼きする高火度焼成の釉下彩。19世紀末にフランスやデンマークなどで完成され、日本ではドイツ人化学者ワグネルの指導を受けた加藤友太郎や宮川香山らが明治20年代に各種釉下彩を完成させ、この技法の先駆けとなった。

[7] 陶芸家、神奈川県生まれ。(1894-1978) 東京高等工業学校(現東京工業大学)窯業科を卒業後、京都市立陶磁器試験場での職員時代に富本憲吉、バーナード・リーチ、柳宗悦と知り合い、その後リーチに伴いイギリスで作陶。帰国後、益子(栃木県芳賀郡)で作陶を開始する。柳宗悦や河井寛次郎らと民芸運動を創始、1936年には日本民藝館の設立に尽力し、主導者の一人として産地の調査や、制作の奨励、作品の収集に努め、日本の工芸界に大きな影響を与えた。昭和30年(1955年)重要無形文化財「民芸陶器」保持者に認定される。

[8] カリウム、ナトリウム、リチウム、カルシウム、バリウムなどのアルカリやアルカリ土類金属のアルミノ珪酸塩鉱物の総称。地殻中に存在する鉱物でもっとも存在量が多くほとんどの岩石に含まれる。媒溶剤として陶磁器の主要な原料として用いられる。単体でも釉化し、志野は釉の主成分にこれを用いたやきものである。

[9] 9-13世紀の唐時代後期から宋時代を中心に活動した中国河北省の古窯。宋代随一の白磁の名窯として知られ、北宋後期の最盛期は良質の磁土を用いた薄く伸びやかに成形された碗、鉢、皿が多く、壺や瓶は少ない。また、口縁に金属製の覆輪が嵌められている。装飾技法は片切り彫りと印花が中心であり、酸化焼成によって釉薬はわずかに黄味を帯び、温かみのある牙白色を呈する。

[10] 耐火性の粘土を焼成して粉碎したもの。使用目的によって粒の粗さを使い分ける。陶磁器素地に調合すると可塑性を減らし、乾燥収縮および焼成収縮を少なくすることができる。煉瓦や匣鉢の原料、窯道具としても使用する。

[11] 釉の着色剤として用いられる遷移金属で、褐色~黒色、紫色などの発色が得られる。化合物をつくりやすく、元素単独の色とは全く違う色になることもある。天目釉への添加や、上絵では鉛とフリットに溶かして赤紫色をつくるのに使用される。結晶ができやすく色が不安定なため、自然にムラをつくる結晶釉にも用いられる。

[12] 朝鮮半島で焼かれ、16世紀に日本に渡った高麗茶碗の一種。侘茶のうつわとして最高位のもつとされ、日本では数多く伝世するが、生産地や時期、名称の由来などの詳細は明らかになっておらず、朝鮮半島では存在もあまり知られていない。

[13] 彫刻家、福井県生まれ。(1873—1954) 日本における近代陶彫の先駆者。東京美術学校(現東京芸術大学)で彫刻を学び、明治33年(1900年)パリ万博では鑄造作品を出品し一等金牌を受賞。明治36~39年にフランスへ留学、セーブル製陶所で陶彫技術を学び、オーギュスト・ロダンにも師事。対象に肉薄する写実的表現による陶彫制作に取り組み、日本の陶彫分野を開拓した。昭和26年日本陶彫会を結成。

[14] 高火度焼成の釉下彩の一つで、ベンガラ・鬼板・黄土などの含鉄土石を顔料として素地に模様を施し、釉下に黒褐色の図様を表す技法。始まりは古く、中国では3世紀頃のものから確認されている。日本では16世紀末頃に唐津や美濃で用いられている。

[15] 桃山時代に美濃で作られたやきもの。ぐい呑手、菖蒲手などに分類され、印刻や線刻による草花文や胆礬、下絵付けによる加飾がみられる。同時期に作られた「瀬戸黒」が茶碗中心であったのに対し、鉢や向付などの食器、花入、香炉、香合などがあり、特に食器の優品が多い。

問題 2

以下に挙げた語句をそれぞれ説明しなさい。

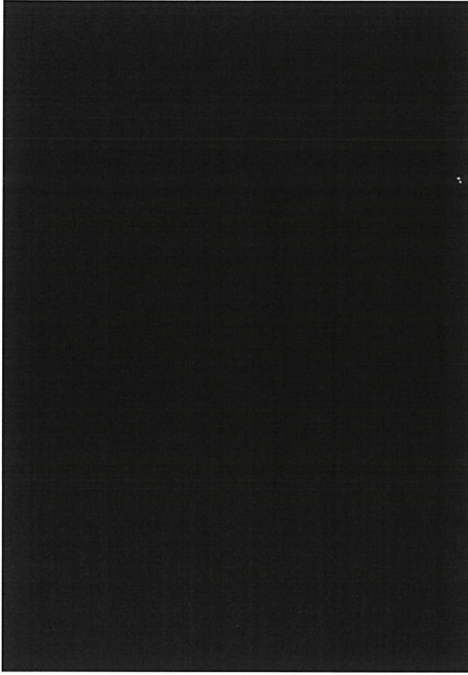
[1] マヨリカ (マジョリカ)

[2] 還元炎焼成

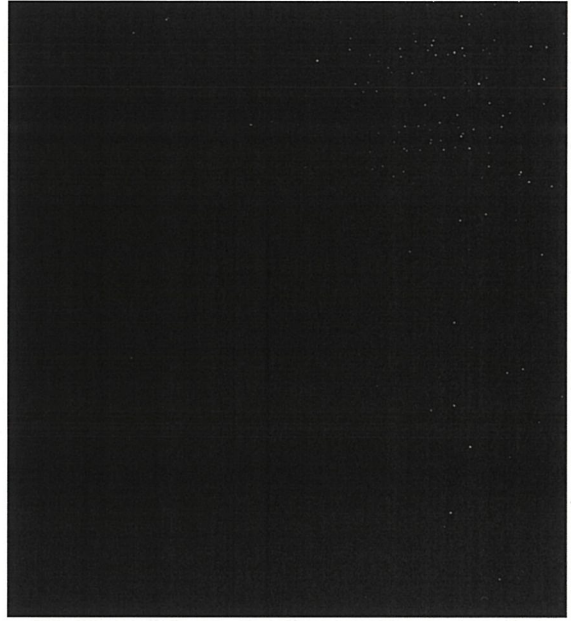
[3] ロストル

問題 3

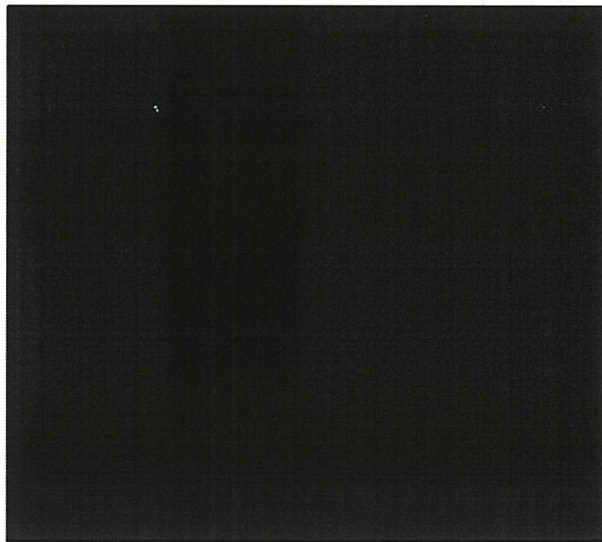
以下に挙げられた図版の作品について、それぞれ説明しなさい。



[1]



[2]



[3]

問題 4

やきものの「素材」について、自身の考えを 400 字以内で述べなさい。

実技試験

(12:30~14:30)

与えられた粘土8kg×2を1体ずつ使い、轆轤びきにより
張りのある大壺1つと大皿1つを八角亀板の上に制作しなさい。

注意事項

- * 受験票は受験番号札の横に置きなさい。
- * 別に用意された粘土(1kg)は八角亀板をとめるために使うこと。
- * 与えられた道具のみ使用すること。
- * 高台を削ることを前提に制作し、ひき終えたものは亀板から切り離すこと。
- * ひき終えたものは亀板ごと轆轤の天板からはずし、轆轤の横に置きなさい。

画像出典

※筆答試験 問題3 [1]

矢部良明 監修『増補新装【カラー版】日本やきもの史』, 美術出版社, 2018年,
p.60. (ISBN978-4-568-40086-1)

※筆答試験 問題3 [2]

『乾山の芸術と光琳』(展覧会図録), 「乾山の芸術と光琳」企画委員, NHK,
(出光美術館、MOA美術館、京都文化博物館), 2007年, p.117.

※筆答試験 問題3 [3]

長井和博 編集「特集 伝説の古陶 英国スリップウェア物語」『芸術新潮』新潮社
第55巻第4号 通巻652号, 2004年4月, p.34.

入学者選抜試験 陶芸(陶・磁・ガラス造形)

令和3年2月13日

受験番号	
------	--

筆答試験	
問題1	
[1]	[9]
[2]	[10]
[3]	[11]
[4]	[12]
[5]	[13]
[6]	[14]
[7]	[15]
[8]	[16]

問題2	
[1]	
[2]	
[3]	

問題 3	
[1]	
[2]	
[3]	

問題4

A large grid of dotted lines for writing answers, consisting of 20 columns and 25 rows.